

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
	薬理作用	相互作用	併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ				薬理に基づ く習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)				症状の悪化 につながるお それ
抗ヒスタミン成分	塩酸ジフェンヒドラミン	塩酸塩なしジフェンヒドラミンはあり レスタミンコーワ軟膏	アレルギーを塗布または皮内注射したときに起こる発赤、腫瘍、そう痒などのアレルギー性皮膚反応は、本剤の1回塗布により著明に抑制される。				頻度不明(過敏症)				炎症症状が強い渗出性の皮膚炎:適切な外用剤の使用でその炎症が軽減後もかゆみが残る場合に使用する。		眼のまわりに使用しない。		通常、症状により適量を1日数回、患部に塗布または塗擦する。	尋麻疹、湿疹、小児ストロフルス、皮膚そう痒症、虫さされ
	ジフェンヒドラミン	レスタミンコーワ軟膏	アレルギーを塗布または皮内注射したときに起こる発赤、腫瘍、そう痒などのアレルギー性皮膚反応は、本剤の1回塗布により著明に抑制される。				頻度不明(過敏症)				炎症症状が強い渗出性の皮膚炎:適切な外用剤の使用でその炎症が軽減後もかゆみが残る場合に使用する。		眼のまわりに使用しない。		通常、症状により適量を1日数回、患部に塗布または塗擦する。	尋麻疹、湿疹、小児ストロフルス、皮膚そう痒症、虫さされ
	マレイン酸クロルフェニラミン	外用の添付文書なし														
鎮痒成分	クロタミン	オイラックス	本剤は抗ヒスタミン作用を示さないこと、またヒトの皮膚感覚のうらそう痒感を抑制するが、他の皮膚感覚には影響を与えないことから、抗ヒスタミン剤、局所麻酔剤とは作用機序を異にすると考えられる。一般には、皮膚に軽いしゃく熱感を与え、温覚に対するこの刺激が観合的にうらそう痒感を消失させるといわれている。				0.1~5%未満(熱感・しゃく熱感、刺激症状(ピリピリ感、ひりひり感等)、発赤、発赤増強・紅斑増悪、分泌物増加、濃潤傾向)	5%以上(過敏症)	本剤に対して過敏症の既往歴	・高齢者・妊婦又は妊婦の可能性のある婦人への大量又は長期にわたる広範囲の使用、乳幼児・小児に対する広範囲の使用	炎症症状が強い渗出性の皮膚炎:適切な外用剤の使用でその炎症が軽減後もかゆみが残る場合に使用する。	・眼あるいは腫瘍周囲及び粘膜には使用しない。 ・塗布直後、軽い熱感を生じることがあるが、通常短時間のうちに消失する。	・高齢者、妊婦又は妊婦している可能性のある婦人には、大量・長期にわたる広範囲の使用は避ける	通常、症状により適量を1日数回患部に塗布又は塗擦する。 ・高齢者・妊婦又は妊婦の可能性のある婦人:大量かつ広範囲の使用は避ける。	湿疹、尋麻疹、神経皮膚炎、皮膚そう痒症、小児ストロフルス	

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化		
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 懸るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化		
			併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量に上 限があるもの	適量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ		用法用量	効能効果
殺菌成分	イソプロピル メチルフェ ノール	フェノールで 代用	本剤は、使用 濃度において グラム陽性 菌、グラム陰 性菌、結核菌 には有効であ るが、芽胞 (炭疽菌、破 傷風菌等)及 び大部分の ウイルスに対 する効果は期 待できない。					頻度不明(過 敏症)		・損傷皮膚及び粘 膜(吸収され中毒 症状発現)			・原液または濃 厚液が皮膚に付 着した場合には 皮膚及び吸収さ れ、中毒症状を 起こすことがある ・眼に入らないよ うに注意すること ・本剤は必ず 希釈し、濃度 に注意して使用 すること。・炎症 または易刺激性 の部位に使用する 場合には、濃 度に注意して正 常の部位に使用 するよりも低濃 度とすることが望 ましい。 ・外用にのみ使 用すること。 ・密封包装、ギブ ス包装、パックに 使用すると刺激 症状及び吸収さ れ、中毒症状が あらわれるおそ れがあるので、 使用しないこと。 ・長期間または 広範囲に使用し ないこと。(吸収 され、中毒症状 を起こすおそ れがある。)・顔 面を避けるため、保 管及び取扱いに は十分注意する こと。	・長期間に使 用しないこ と。(吸収さ れ、中毒症状 の発現のお それ。)		効能・効果 用法・用量(本 品希釈倍数) ・手指・皮膚の消毒:フェ ノールとして1.5~2%溶液 を用いる。(50~87倍) ・医療用具、手術室・病室 家具・器具・物品などの消 毒:フェノールとして2~ 5%溶液を用いる。(20~ 50倍) 排泄物の消毒:フェノール として3~5%溶液を用い る。(20~33倍) 下記疾患の鎮痒 痒疹(小児ストロフルスを 含む)、じん麻疹、虫さされ 液: フェノールとして1~2%溶 液を用いる。(50~100倍) 軟膏:フェノールとして2~ 5%軟膏を用いる。(20~ 50倍)		

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 薬理にお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ	薬理に基づ く 習 慣 性			適応対象	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				使用量に上 限があるもの
殺菌成分	塩化ベンザ ルコニウム	0.1w/vvチア ミトール水	・本剤は使用 温度におい て、栄養型細 菌(グラム陽 性菌、グラム 陰性菌)、真 菌等には有 効であるが、 結核菌及び 大部分のウイ ルスに対する 殺菌効果は 期待できな い。イオン界 面活性剤であ るので、表面 張力を低下さ せ、清浄作 用、乳化作用 等を示す。 ・作用機序 は、陰電荷を 帯びる細菌に 陽電荷を帯び る塩化ベンザ ルコニウムが 菌体表面に 吸着・集積さ れ、菌体たん 白を変性させ 殺菌作用をあら わす。										・原液は皮膚・粘 膜に付着及び腫 れに入らないよう に注意する(刺激性 がある)。 ・炎症または易 刺激性の部位 (粘膜、陰股部 等)への使用。正 常の部位への使 用より低濃度と することが望まし い。また、使用後 は滅菌精製水で 水洗する。 ・深い創傷また は膿に使用する 希釈水溶液は、 調製後滅菌処理 すること。 ・経口投与しない こと。洗眼には使 用しないこと。 ・密封包装、ギブ ス包帯、パップに 使用すると刺激 症状があらわれ ることがあるの で、使用しないこ とが望ましい。			効能・効果:用法・用量(塩化ベンザルコ ニウム濃度) ①手指・皮膚の消毒:通常石けんで十分に 洗浄し、水で石けん分を十分に洗い落と した後、塩化ベンザルコニウム0.05~0.1% 溶液に浸して洗い、滅菌ガーゼあるいは布 片で清拭する。術前の手洗の場合には、5 ~10分間ブラッシングする。 ②手術部位(手術野)の皮膚の消毒:手術 前局所皮膚面を塩化ベンザルコニウム 0.1%溶液で約5分間洗い、その後塩化ベ ンザルコニウム0.2%溶液を塗布する。 ③手術部位(手術野)の粘膜の消毒、皮 膚・粘膜の創傷部位の消毒:塩化ベンザ ルコニウム0.01~0.025%溶液を用いる。 ④感染皮膚面の消毒:塩化ベンザルコ ニウム0.01%溶液を用いる。 ⑤医療用具の消毒:塩化ベンザルコニ ウム0.1%溶液に10分間浸漬するか、または 超音波に消毒する際は、器具を予め2%炭酸 ナトリウム水溶液で洗い、その後塩化ベ ンザルコニウム0.1%溶液中で15分間煮沸 する。 ⑥手術室・病室・家具・器具・物品などの消 毒:塩化ベンザルコニウム0.05~0.1%溶 液を布片で塗布・清拭するか、または噴霧 する。 ⑦腫瘍 塩化ベンザルコニウム0.02~ 0.05%溶液を用いる。 ⑧結核菌の洗浄・消毒 塩化ベンザルコ ニウム0.01~0.05%溶液を用いる。 ・炎症または易刺激性の部位(粘膜、陰股 部等)への使用:正常の部位への使用より	
かゆみ・虫さされ用薬																	
抗ヒスタミン成分	塩酸イソチ ベンジル	アンダント ールゼリー ゼリー状軟 膏	抗ヒスタミン 作用及び抗 アレルギー作 用を有する。 毛細血管浸 透抑制作用 を有する。		0.1%~5%未 満(しみる、びり びり感・ひり ひり感・疼痛 等の刺激感) 0.1%未満 (熱感、灼熱 感)	0.1%~5%未 満(過敏症)										通常、症状により適量を1 日数回患部に塗布する。	皮膚そう痒症、 じんま疹様苔 癬、小児ストロ フルス、虫さ され、痒疹、神経 皮膚炎、湿疹、 多形滲出性紅 斑・凍瘡・薬 疹・日焼けに 伴うそう痒
抗ヒスタミン成分	塩酸ジフェ ンヒドラミン	塩酸塩なし ジフェンヒ ドラミンはあり ーレスタミン コーワ軟膏	アレルギーを 塗布または皮 内注射したと きに起こる発 赤、腫脹、そ う痒などのア レルギー性皮 膚反応は、本 剤の1回塗布 により著明に 抑制される。			頻度不明(過 敏症)										通常、症状により適量を1 日数回、患部に塗布ま たは塗擦する。	尋麻疹、湿疹、 小児ストロフル ス、皮膚そう痒 症、虫さされ

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果		
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上 限があるもの			過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ
	ジフェンヒドラ ミン	レスタミン コーワ軟膏	アレルギーを 塗布または皮 内注射したと きに起こる発 赤、膨疹、そ う痒などのア レルギー性皮 膚反応は、本 剤の1回塗布 により著明に 抑制される。														通常、症状により適量を1 日数回、患部に塗布また は塗擦する。	蕁麻疹、湿疹、 小児ストロフル ス、皮膚そう痒 症、虫さされ
	抗 ヒスタ ミン	ロ-マレイン 酸クロルフェ ニラミン	外用の添付 文書なし															
鎮 痒 成 分	クロタミト ン	オイラックス	本剤は抗ヒス タミン作用を 示さないこと 、またヒトの皮 膚感覚のうち そう痒感を抑 制するが、他 の皮膚感覚 には影響を与 えないことな どから、抗ヒ スタミン剤、 局所麻酔剤と は作用機序 を異にすると 考えられる。 一般には、皮 膚に軽いしゃ く熱感を与 え、温覚に対 するこの刺激 が競合的に そう痒感を消 失させるとい われている。				0.1~5%未満 (熱感・しゃく 熱感・刺激症 状(ヒリビリ 感、ひりひり 感等)、発 赤、発赤増 強・紅斑増 悪、分泌物増 加、浸潤傾 向)	5%以上(過敏 症)		本剤に対して過敏 症の既往歴	・高齢者・妊婦又は 妊娠の可能性の ある婦人への大量 又は長期にわたる 広範囲の使用、乳 幼児・小児に對する 広範囲の使用	表症症状が 強い漫出性 の皮膚炎。適 切な外用剤 の使用でそ の炎症が軽 減後もかゆ みが残る場 合に使用する。		・顔あるいは眼 周囲及び粘膜に は使用しない。 ・塗布直後、軽い 熱感を生じること があるが、通常 短時間のうちに 消失する。	・顔あるいは眼 周囲及び粘膜に は使用しない。 ・塗布直後、軽い 熱感を生じること があるが、通常 短時間のうちに 消失する。	・高齢者・妊婦 又は妊娠して いる可能性 のある婦人 には、大量・ 長期にわた る広範囲の 作用は避け る	通常、症状により適量を1 日数回患部に塗布又は塗 擦する。 ・高齢者・妊婦又は妊娠の 可能性のある婦人：大量 かつ広範囲の使用は避け る。	湿疹、蕁麻疹、 神経皮膚炎、 皮膚そう痒症、 小児ストロフル ス
局 所 刺 激 成 分	アミノ安息香 酸エチル	アミノ安息香 酸エチル「丸 石」(内用・ 外用)	胃粘膜の知 覚神経末端 を麻痺させ、 中枢への刺 激伝達を遮 断して疼痛、 嘔吐を鎮め る。				0.1~5%(食 欲不振、悪 心、口渇、便 秘)、0.1%未 満(下痢)、メ トヘモグロビ ン血症(小 児))	頻度不明(過 敏症)		本剤過敏症既往 歴 乳幼児(内用・坐 剤の場合)	高齢者、妊婦又は 妊娠の可能性		(内用) 口内にしびれ等 を残さないため 速やかに飲み下 す (外用) 眼には使用しな いこと[軟膏・液 剤の場合]、誤つ て吸入しないこと [散布剤の場合]	長期連続投 与回避		(内用) 1日0.6~1g、3回分服。適 宜増減。高齢者は減量 (外用) 通常、5~15%の軟膏剤、 液剤、散布剤として、また は、1個中200mg~300mg を含有する坐剤として適宜 患部に使用する	(内用) 下記疾患に伴 う疼痛・嘔吐： 胃炎、胃潰瘍 (外用) 下記疾患にお ける鎮痛・鎮 痒：外傷、熱 傷、日焼け、皮 膚潰瘍、掻痒 症、痔疾	

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ				D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化に伴う 使用環境の 変化				
			C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 留意性								適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)
評価の視点	薬理作用	相互作用	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理に基づく 留意性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果
局 所 麻 酔 成 分	塩酸ジブカイ ン ヘルカミン 注、表面麻 酔類似と考 え使用	感覚・求心神 経繊維のNa+ チャネルを遮 断すること により局所麻 酔作用を発現 する。効力、持 続性、毒性い ずれも最大級 の局所麻酔 薬であるが、 より効力を強 めるために局 所鎮痛以外の 目的にはエ ピネフリンを 添加して用い る			振戦、痙攣等 の中毒症状 (頻度不明)	ショック(頻度 不明)	頻度不明(眩 暈、不安、興 奮、霧視、眩 暈、悪心・嘔 吐等)	頻度不明(過 敏症)	本剤に対し過敏症 の既往歴	本人又は両親、兄 弟に気管支喘息、 発疹、毒麻疹等の アレルギー反応を 起こしやすい体質。 高齢者。妊婦又は 妊娠している可能 性のある婦人。				使用に際し、目的濃度の 水性注射液または水性液 として使用する。 ただし、年齢、麻酔領域、 部位、組織、症状、体質に より適宜増減する。 仙骨麻酔:0.05~0.1%注 射液にエピネフリンを添加 したものを、通常成人 10~30mgを使用する。 伝達麻酔(基準最高用量: 1回40mg):0.05~0.1%注 射液にエピネフリンを添加 したものを、通常成人 3~40mgを使用する。 浸潤麻酔(基準最高用量: 1回40mg):0.05~0.1%注 射液にエピネフリンを添加 したものを、通常成人 1~40mgを使用する。 表面麻酔:耳鼻咽喉科領 域の粘膜麻酔には、1~ 2%液にエピネフリンを添 加したものを、噴霧ま たは塗布する。眼科領域 の麻酔には、0.05~0.1% 液にエピネフリンを添加 したものを、通常成人に は1~5滴を点眼する。 尿道粘膜麻酔には、0.1% 液にエピネフリンを添加 したものを、通常成人 男子10~20mg、女子3~ 7mgを使用する。膀胱粘 膜麻酔には、0.025~ 0.05%液にエピネフリンを 添加したものを、通常 成人10~20mgを使用す る。局所鎮痛には、0.025 ~0.05%液を用い、適量を 使用する。 歯科領域麻酔:0.1%注射 液にエピネフリンを添加 したものを、伝達麻酔・ 浸潤麻酔には通常成人1 ~2mgを使用する。	仙骨麻酔、伝 達麻酔、浸潤 麻酔、表面麻 酔、歯科領域 における伝達 麻酔、浸潤麻 酔

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重要な副作用のおそれ		C' 薬効ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重要な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化		
評価の視点	薬理作用	相互作用	相互作用		重要な副作用のおそれ		薬効ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	
			併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ	用法用量	効能効果
局所麻酔成分	リドカイン	キシロカイン液「4%」、塩酸リドカイン表面麻酔に類似のため使用	神経阻のナトリウムチャネルをブロックし、神経における活動電位の伝導を可逆的に抑制し、知覚神経及び運動神経を遮断する局所麻酔薬である。表面・浸潤・伝達麻酔効果は、塩酸プロカインよりも強く、作用持続時間は塩酸プロカインよりも長い。		意識障害、痙攣、虚寒(頻度不明)	ショック(頻度不明)	頻度不明(眼瞼、不安、興奮、霧視、眩暈、悪心・嘔吐)	頻度不明(過敏症)		本剤の成分又はアミド型局所麻酔薬に対し過敏症の既往歴。	高齢者又は全身状態が不良。心刺激伝導障害。重症の肝機能障害又は腎機能障害。幼児。妊婦又は妊娠している可能性のある婦人。				過量投与で中毒症状が現れる。症状として中枢神経系(不安、興奮、意識消失、全身痙攣など)、心血管系(血圧低下、徐脈、循環虚脱など)が現れる。眼科(点眼)用として使用しないこと。注射用として使用しない。		塩酸リドカインとして、通常成人では80~200mg(2~5mL)を使用する。なお、年齢、麻酔領域、部位、組織、体質により適宜増減する。  幼児(特に3歳以下)では低用量から投与を開始。	表面麻酔
抗炎症成分	グリチルレチン酸	デルマクリン軟膏	グリチルレチン酸は急性炎症に対する抗炎症作用(浮腫抑制-ラット、肉芽腫抑制-ラット、抗紅斑-モルモット)を有する。抗炎症作用は主成分であるグリチルレチン酸の化学構造がハイドロコチゾンの化学構造に類似しているところによると推定される。					5%以上又は頻度不明(過敏症)						眼科用として使用しない			通常、症状により適量を1日数回患部に塗布または塗擦する。	湿疹、皮膚そう痒症、神経皮膚炎
抗炎症成分	サリチル酸メチル	サリチル酸メチル「ミヤザワ」					大量使用:頭痛、悪心・嘔吐、食欲不振、頻脈	過敏症		本剤に対し過敏症の既往歴			腫には使用しない		大量使用による頭痛、悪心・嘔吐、食欲不振、頻脈		5%又はそれ以上の濃度の液剤、軟膏剤又はリニメント剤として皮膚局所に塗布する	下記における鎮痛、消炎、関節痛、筋肉痛、打撲、捻挫

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往症、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化
評価の視点			併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ		
殺菌成分	フェノールを 使用	本剤は、使用 濃度において グラム陽性 菌、グラム陰 性菌、結核菌 には有効であ るが、芽胞 (炭疽菌、破 傷菌等)及び 大部分のウ イルスに対 する効果は期 待できない。					顔度不明(過 敏症)		・損傷皮膚及び 粘膜(吸収され 中毒 症状発現)				・原液または濃 厚液が皮膚に付 着した場合には 腐蝕及び吸収さ れ、中毒症状を 起こすことがある ・眼に入らないよ うに注意すること ・本剤は必ず希 釈し、濃度に注 意して使用する こと ・炎症または易 刺激性の部位に 使用する場合は 、濃度に注意 して正常の部位 に使用するよりも 低濃度とすること が望ましい。 ・外用にのみ使 用すること ・密封包装、ギブ ス包装、パックに 使用すると刺激 症状及び吸収さ れ、中毒症状が あらわれるおそ れがあるので、 使用しないこと ・長期間または 広範囲に使用し ないこと。[吸収 され、中毒症状 を起こすおそれ がある。] ・顔軟を選けるた め、傷及び取扱 いには十分注 意すること。	・長期間に使用 しないこと。 ・長期間または 広範囲に使用し ないこと。[吸収 され、中毒症状 を起こすおそれ がある。] ・顔軟を選けるた め、傷及び取扱 いには十分注 意すること。	効能・効果 用法・用量(本 品希釈倍数) ・手指・皮膚の消毒:フェ ノールとして1.5~2%溶液 を用いる。(50~87倍) ・医療用具、手術室・病室・ 家具・器具・物品などの消 毒:フェノールとして2~ 5%溶液を用いる。(20~ 50倍) 排泄物の消毒:フェノール として3~5%溶液を用い る。(20~33倍) 下記疾患の鎮痒 痒疹(小児ストロフルスを 含む)、じん麻疹、虫さされ 液: フェノールとして1~2%溶 液を用いる。(50~100倍) 軟膏:フェノールとして2~ 5%軟膏を用いる。(20~ 50倍)		

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴・治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の 症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの				使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ	用法用量	効能効果
殺菌成分	塩酸クロルヘキシジン	グルコン酸塩として5%ピピテン液	抗菌作用(in vitro試験) ・広範囲の微生物に作用し、グラム陽性菌には低濃度でも迅速な殺菌作用を示す。 ・グラム陰性菌には比較的低濃度で殺菌作用を示すが、グラム陽性菌に比べ抗菌力に幅がみられる。 ・芽胞形成菌の芽胞には効力を示さない。 ・結核菌に対して水溶液では静菌作用を示し、アルコール溶液では迅速な殺菌作用を示す。 ・真菌類の多くに抗菌力を示すが、全般的に細菌類よりも抗菌力は弱い。 ・ウイルスに対する効力は確定していない。 作用機序 作用機序は十分には解明されていないが、比較的低濃度では細菌の細胞膜に障害を与え、細胞質成分の不可逆的漏出や酵素阻害を起こし、比較的高濃度では細胞内の蛋白質や核酸の沈着を起こすことが報告されている。			ショック(0.1%未満)	0.1%未満(過敏症)		・クロルヘキシジン製剤過敏症の既往歴 ・脳、脊髄、耳(内耳、中耳、外耳) (聴神経及び中枢神経に対して直接使用した場合は、痙攣、神経障害を来すことがある。) ・腫、膀胱、口腔等の粘膜面(ショック症状の発現が報告されている。) ・産婦人科用(膈・外陰部の消毒等)、泌尿器科用(膀胱・外性器の消毒等)には使用しない。 ・眼	・薬物過敏症の既往歴 ・喘息等のアレルギー疾患の既往歴、家族歴			・本剤は必ず希釈し、濃度に注意して使用すること。 ・外用にのみ使用する。 ・眼に入らないように注意する。	本品は下記の温度(グルコン酸クロルヘキシジンとして)に希釈し、水溶液又はエタノール溶液として使用する。 効能・効果 用法・用量 (使用例) ①手指・皮膚の消毒 0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈) (通常時:0.1%水溶液(30秒以上) 汚染時:0.5%水溶液(30秒以上)) ②手術部位(手術野)の皮膚の消毒 0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈)又は0.5%エタノール溶液(本剤の10倍希釈) (0.5%エタノール溶液) ③皮膚の創傷部位の消毒 0.05%水溶液(本剤の100倍希釈) (0.05%水溶液) ④医療用具の消毒 0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈)又は0.5%エタノール溶液(本剤の10倍希釈) (通常時:0.1%水溶液(10~30分) 汚染時:0.5%水溶液(30分以上)) 緊急時:0.5%エタノール溶液(2分以上)) ⑤手術室・病室・家具・器具・物品等の消毒 0.05%水溶液(本剤の100倍希釈) (0.05%水溶液)		



鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化		
評価の視点	薬理作用		相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果
			併用禁忌(他 剤との併用) により重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ			
局所 刺激 成分	アンモニア	アンモニア 水「エビス」					頻度不明(局 所刺激、発 赤、灼熱感)	頻度不明(過 敏症)							希釈して使用 しないよう にする 原液または濃原 液の蒸気を吸入 すると、呼吸器 等の粘膜を刺激 し、喉頭症れん、 肺・気管支に障 害を起すことが ある	刺激作用を 有するので、 長期間また は同一部位 に反復使用 しない 湿布等による 長期間にわた る皮膚との 接触を避ける		②2～10倍に希釈し、塗布 する。	①経口 皮アンモニア・ ウイキョウ精の 調剤原料に用 いる。 ②外用 虫さされ
清涼 化 成分	カンフル	カンフル精	局所刺激作 用を有し、皮 膚に塗布する と発赤又は冷 感を生じる				頻度不明(過 敏症)								蒸溜面へは使用 しない 眼又は眼の周囲 には使用しない			患部に適量を塗布あるい は塗擦する。	下記疾患にお ける局所刺 激、血行の改 善、消炎、鎮 痛、鎮痒 筋肉痛、挫傷、 打撲、捻挫、凍 傷(第1度)、凍 瘡、皮膚そう痒 症
	メントール	日本薬局方 メントール 「ミヤザワ」																	芳香・焼臭・矯 味の目的で調 剤に用いる